

S - I - 4

証の病態モデルと漢方ゲノムの解明に向けて

富山医科薬科大学・和漢薬研究所・病態生化学部門

済木 育夫

長い歴史をもつ漢方の診断、予防、治療において、個人の症候 (symptom) や体質 (responder/non-responder) を含む、いわゆる証 (pathogenic alteration, 病態の変化) を西洋医学的に解明することは、東洋医学の「個の医療」(テーラーメイド医療) という概念に通ずるとともに、漢方の基礎的研究や治療を押し進めていく上でも必須と思われる。

本発表では、証の違い/変化とそれに対応した漢方方剤が有効性を示す知見など、証を明らかにするための手がかりを与えると思われるいくつかの例について紹介したい。

- 1) 癌細胞の転移病態モデルにおいて、漢方方剤(補剤)により、明らかに異なった抑制メカニズムに基づいて効果発現していること、さらに効果発現に方剤中の構成処方/生薬の役割分担と組み合わせが関係していること。
- 2) 標的臓器への転移様式(肺あるいは肝への転移)の違いにより、効果発現のために用いる漢方方剤が異なること。
- 3) IgE 介在性三相性皮膚炎モデルにおける三つの炎症反応相に対して、漢方方剤および抗アレルギー薬の効果発現が異なり、それに基づいていくつかのパターンに分類されうること
- 4) ストレスなどの影響因子の負荷により三相性皮膚炎の病態が増悪するが、ストレス負荷の有無により漢方方剤の効果に違いが見られること。
- 5) 異なった系統の純系マウスを用いた三相性皮膚反応には、体質の差異を表わしているかのよう、明らかな系統差が認められる。

このように、証は genetic あるいは epigenetic に影響あるいは調節・制御されうるとともに、疾患関連遺伝子などの種々の決定因子(critical determinants)が複数関与していると考えられる。したがって、ゲノム全体を対象として解析するような新しい技術(DNA チップやマイクロアレー等)を用いることにより、一括して遺伝子レベルでの発現を評価(ゲノムのクラスタリング)し、解析する技術を導入して、その手法を確立することも、証を西洋医学的に解釈していく上で極めて重要であると思われる。